井上：それでは再開します。

これからの保育、教育の動向ということで３名の先生方には話題を提供していただきましいた。シンポジウムですので様々な先生方のお話で根っこのところでつながっているところが幾つかあると思いますが、そういうところを中心にお話ができればと思います。

網野先生からご助言、ご質問をいただいて進めてさせていただきます。それでは網野先生お願いします。

網野：ご助言といいますと上から目線となりますが、改めて非常に重要なポイントを具体的に学ばせていただきました。ありがとうございます。

そこで３人のシンポジストの先生方のお話に沿っていろいろなことをお話して、その中でご質問をさせていただき、その後お話をお答えをしていただきたいと思います。

早速入りますが、改めて乳幼児期の教育の一番の重要なところは何か、ケア＆エディケーションとかアーリーチャイルドエディケーションそれは基本にあるということで、いろいろお聞きする中で３人の先生方の話で、もし、私がちょっとまだ触れていなかった部分があるんですが、非常に大事だと思っている面を、それを加えてコメントさせていただきたいと思います。

要綱の１２Ｐの参考資料としてあげましたというお話で終わりましたが、その中で権利、子どもの最善の利益とか３歳以上の子どもに対する養護、０～２歳からの養護と、教育、特に１２Ｐの最初の部分で言いますと、つまり保育は何のためにあるのか、特に乳幼児期においてそれはどうなのかというときに真ん中のやや上からの、パラグラフ、チャイルドファ―ストという言葉を上げています。これは比較的良く使われるんですが、2011 年東京家政大学日本保育学会を開いたときに私たちは、このチルドレンファ―ストを特集として主要なテーマとして取り上げました。東京家政大学は、いろんな付属幼稚園とかナーサリールームがありますが、私自身家政大学で教育研究に携わる前、6 年間双葉で仕事をしており半分はナースリールームの室長、園長を兼ねておりました。子ども主体として捉えた時ナースリールームは非常に進んでいると実感しておりました。0 歳から 2 歳までの段階での保育と教育の一体的な進め方を改めていろいろ確認できた部分があります。それはやっぱり、チルドレンファ―スト、まず子どもを主旨としたとき、ここでは子ども主体の保育を考えていく、これが先ほどの先生方のいろんなお話と結び付けたい大きな部分でした。当たり前ですが、保育者、教育者はメジャーとして当然主体で保育、教育をしなくてはという姿勢ですよね。

そこに次のステップ、その時子どもは虐待になっていないか、子ども主体の視点がないと非常に大きな、いろんな課題が出てくるわけです。

ｐ１２倉橋惣三、デューイの内容をあげましたが、今日のお話を伺っている中で、もちろん保育者、教育者主体であるのは当然なんですが、子ども主体という相互関係の中で捉えることを、乳幼児期にとって改めて再確認しながら聞かせていただきました。

そこで具体的に咲間先生のお話の中で、いくつかあったと思いますが、ペリー就学前教育とかOECDなどの話の中でなぜ、非認知的能力の高さが影響するのか、改めて説明がありました。明らかに、日本はそういうことは進めておりました。かなり、国際的にみても日本はレベルが高いし、いろいろやっていたと思うが、何しろ確かにエビデンスが不足していたと、それがどうなんだと改めて再確認をする重要性、例えば1980年代後半、90年には入っていなかったと思うが、徳島大学の心理学の佐野先生がおられて、この当時保育園に早期から通っている子ども達は、登校拒否や不登校の発現率が低いと教育心理学研究で発表。これは本当かとかなり確かめさせてもらいました。少なくても研究室のデーターの解析から確かにそのことと並行して、0歳から保育園に通うことは子どもにもマイナス、特に親は何をしているんですかというのがまだまだ強かった時代です。今でもありますが。ほとんどプロジェクト研究でした。

０歳からの保育が、子どもにどのような影響を及ぼすか、結論から言いますと、マイナスと指摘される明瞭な事柄や根拠、エビデンスは無いのではないかということです。逆に言えば、プラスもそれほど明瞭に見えない、ただし佐野先生が指摘されたこととちょっと関係すると、社会性、コミュニケーション能力、これは小さい時からの保護者、親以外との関り、まして魅力のある保育者と関わることが大きな影響になっていると考えられます。

本当に日本はほんの一部の研究で、柔軟的に長年にわたって、青年期、壮年期、時には老年期までに入るかもしれないがこの柔軟的な研究は、日本では不足していたと思います。

これに基づいてどんなことが言えるのか、特に保育士養成を担う研究者がいるなら、今からでも遅くない、過去の積み重ねがあるなら、それを続けることが大事なのかなと思いました。

それから咲間先生が一番の重要なポイントとされているいろんな国の多文化の中での子どもの保育を、いろいろ教えていただきましたが、そのお話の中で帰属意識がありました。これはかなり大事ではないかと思いました。

つまりわたくしたちは経験から研究の分析もありますが、保育園で様々な文化だけではなく例えば障害をもっている子どもとのかかわりも含めて、特に保育者保護者が捉える子どもの理解に対して、子どもが捉える子ども理解は凄まじい力がありますが、帰属意識の発達の仕方に関係している、言葉、言語を通して抽象的概念を通して認知的能力の働きの中で捉えています。これに対して子どもたち

は真っ直ぐに当たり前のように感情や行動、コミュニケーションを通して学びをもっていく、そこにははるかに、親や保育者より、特別な子どもに対して当たり前の理解をもたらせやすいですね。

私たちは他者に対して心理的距離の置き方の学びですが、早い幼少期からあると心理的距離、差別が無くなる。特別な子どもと共に過ごす環境があれば、障がいへの偏見差別が心理的距離をクリアできるのではないか。親よりはるかにその子どもを理解ができます。心理的距離と自分自身、アイデンティティーがどこにあるのかすでに乳幼児期から形成が始まっていると思います。もし私が勝手に解釈するのであれば、　帰属意識のキーワードはいろんなものを示唆しているのではないかと思いました。その点で、もし咲間先生からはご自分の専門領域の中で子どもがどのような帰属意識を持っているのか外国人の学生と日本人の学生これも含めて更に現在考えていることがあれば教えていただきたい。

それから六本木先生と武藤先生、お二人ともさらに共通している部分で、自発的な遊びを通した学びの重要性ついて、小学校、幼稚園保育園の違い、子どもがたっぷり学んでいながら、子ども主体を見落としていないか、生活と遊びを通してどれほど学んでいるか数量化できない部分かもしれません。しかしその基礎たるや家庭では療育、教育ではなしえないことををいっぱい持っているのではないかと思います。

子ども主体の自発的な遊びを通して日々、刻々と学びを増やしていく実感をいかに、保育の質として改めて教えていただいた部分がありました。この点で質問したい部分があるんですが、お二人の先生に対して少なくとも共通の部分は武藤先生の２４Ｐの（３）の円滑な小学校への発信、遊びの中でどのような学びがあるのか、積み重ねた体験の価値を具体的に明らかにして小学校に発信していくのか、非常に難しいとの話でした。お二人の先生にこのことで、もし皆様方へのヒントや提言があれば教えて頂きたいです。少なくともそれは数量化できない、つまり認知的能力だから数量化できる、非認知的能力だから数量化できない、だから評価をどのようにとらえていくのか、これではいけないと思うんですが評価とは何か、評価の仕組みだと思います、例えば２４Ｐ下にあるお二人の先生が指摘された審議のとりまとめ３つの柱、様々な具体的な１０の内容、２０Ｐの下に書かれている、お二人の先生の内容で言うと２０Ｐ下２４Ｐ下の両方にかかわり、例えばこれをどんどん進めていくと幼児期に育ってほしい力、自然とのかかわり、生命の尊重にたどりつくのではないかと思います。これは凄い幼児期の大切な部分です。もし評価をしたときに自然とのかかわりは十分だったでしょうか。生命とのかかわりは十分だったでしょうか。そんな評価では何も見えてこないのです。具体的に言えばどう自然と関わっていくのか、生命の尊重にどうかかわったかというよりも、どんな個性、能力特徴があるのかを捉えて、皆さんで、私たち関係

で評価として何かできるようにする、例えばそういうことだと思います。非認知的で例を挙げますが上等指数、IQ に対して EQ で測れば良い、これは凄く危険だと思います。結局数量化とは何か、評価の本質は数量化と関係しているので、今、まさにご指摘いただいた内容を、結構取り組んでいる園もいろいろあるんですが、具体的に表現できることが大事だと思います。そのようなことについて、もし何かコメントがありましたらお願いしたいと思います。

補足として武藤先生の２３Ｐのこれからの重要な保育教育を考えるところ、一元化の意味するところを指摘されました。おっしゃる通りですが、先ほど話を申し上げたのは、制度や管轄上をたとえば例に挙げてみたたものであってその後私のプロジェクト研究では７つの事項について一元化検討しています。まさに

１、制度、２、所管、３、保育の場、４、保育内容　５、保育者の養成　　６、入園するシステム　　７、保育料

７つの項目がすべて一元化されている国は調べた結果ないと思います、スウェーデンでもない、完全一元化をするのはそれほど難しい、あえて日本は総合こども園構想の中ではすべて７つを一本化する考え、私たちからみれば、保育内容に関しての一元化は一体どういう姿なのか、保育者の一元化とはどういうことなのか、もし時間がありましたら３人の先生方から、新しい仕組みでできた保育教諭の新しいアイデンティティーについて、改めてコメントをいただきたいです。よろしくお願いします。

井上：では、六本木先生から最初のご質問についてお願いします。

六本木：すいませんもう一度、確認させていただいて良いですか。

井上：六本木先生と武藤先生の資料を基にその中の 10 の姿について、幼児期の終わりまでに育ってほしい姿についてそれの評価のやり方についてどうお考えですか

六本木：私も本当に難しく思っているのですが、評価の本質は数量化ではないと具体的に表現できるというお考えの中で、先ほど自然とのかかわり、生命の尊重について具体的にお話をいただいたのですが、うちの幼稚園の先生のアンケートの中からも例えば、季節の移り変わり、天気の移り変わり、身近な小動物、草花に実際に触れる中で、興味関心を示していますとのこと。そういう表現以外の評価はどういうことなのでしょうかということが、申し上げていただきたいところで、それを更に小学校の先生方にお伝えするのはどうあるべきなのか、難しいところです。

井上：武藤先生お願いします

武藤：明快な答えにはならないかもしれませんが小学校には平成元年に生活科が創設されたんですが、その際にも生活科は遊びを学習にするという位置付けでしたが当時は現場でも、遊んでいて何を学んでいることになるのか、気づきの質は何なんだ？知的な気づきは要領にもありましたが、普通の気づきと知的な気づきとは

何が違うんだという議論さえ起って、まさにそこは、幼児教育側で言う遊びを通してどんなことが積み重ねられて、どんなことを子どもたちが学び取っているのか、完全に小学校側の認識がないということの露呈だったんだろうなと思います。ですから２４Ｐの資料については自分が小学校側が長かったのですが幼児教育の先生方と話し合いをするときやっぱり違う、自分が捉えられていなかったのか、遊びの中で積み重ねているのは何かということがずっと捉えられていなかったことがありました。遊びの中でどんなことに気付き始めているのか、新しく体験していることは何か、遊んでいる中で子どもたちがどんなことに気付いているか、後は体験を繰り返しながら夢中になって、いわゆる没頭体験をしてきていることは何かということを、丁寧にお話をしていただくことが、一番の理解に繋がっていくことだろうと思います。

生活科も平成の時代と共に歩んできていますので、間もなく 30 年になるわけですけれども、だいぶ現場のほうでも遊びの中の学びをどう捉えていくか認識が耕されてきているところです。ですので今お話ししたような観点で幼児教育側から引き続き具体的な子どもの姿でお話していただいて結構だと思いますので数量化できないのは、その通り人の発達ですから。今ある子ども達がどういう風になっていて、それをどこから指導の出発点としていけば良いのか、小学校側が見定めていくことが大事な接続のお互いの歩みよりではないかと思います。

評価についても、様々な考え方があると思いますが、先生方もご自身で自己評価をなさっていたり、幼稚園、保育所の中で子どもの育ちとか見取りを指導計画に基づいた、保育計画記録を頼りにしながら、子どもの 1 年の切取りのものではなく、成長を見とっていく面は鍛えられていると思います。積み重ねが不可欠であるとお話ししたように幼児教育には有効ではないかと思います。

井上：ありがとうございました。その他いくつかご指摘いただいた点もございました。一元化については詳しくご指導いただきありがとうございました。その他質問が２，３ございましたが時間の都合上この辺で終了と致します。